故　名誉会員　斉藤静脩氏をしのぶ

昭和 43 年 12 月 11 日，斎藤静脩氏逝く。先生は明治 17 年9月 11 日 斎藤直治さんの長男として北海道岩内郡泊村に生れ，札幌中学から一高を経て東大工学部土木科に入学，明治 44 年卒業，東大教授で小樽港修築事務所長を兼任の広井　勇先生にすすめられて北海道庁に奉職された。

その頃の北海道は本格的な開拓がはじまろうという時代で，先生は留萌，旭川地方等の土木派出所長として，まずこれら未開地方の道路新設に専心された。この大正初期の北海道河川は石狩川下流部にわずかに治水工事が見られただけで，多くの河川は荒れ放題であった。大正 10 年釧路川，常呂川，続いて十勝川治水事務所が開設され，先生はこれらの所長を命ぜられた。釧路川では洪水防除と年間 10 万坪の土砂が釧路港に流入するのを防ぐため 10 km の新川を開削し，釧路川を流送する年間 30 万石の木材の処理など困難な治水工事を完成し，十勝川では帯広市下流のわん曲部に 15 km の新水路を開削して洪水疎通をはかり，あわせて数千ヘクタールの土地開発を促進された。その後，改組された帯広治水事務所所長として，さらに，網走川，湧別川，渚滑川，天塩川など北海道北半分の全河川の治水工事を精力的に担当された。この間，わが国初めての 41 m という長径間 コンクリート ゲルバー 橋を計画（横道現北大教授担当）されたが，この十勝大橋は北海道コンクリート橋界に大きな貢献となった。

昭和 12 年土木部河川課長に就任されたが，河川法が北海道に適用されて間もない頃で，北海道河川行政上の転換期にあたり，先生は北海道の河川概要（詳論ともいうべきもの）をまとめられ，北海道河川の将来のあり方を明らかにされた。

昭和 14 年勅任技師（技監に相当）に就任されたが，先生を中心に北海道工業論が展開し，苫小牧工業港の今日の姿が先生によって描き出された。先生の道路，河川，港湾，漁港，土地開発等，広範囲にわたっての計画，構想は常に 10 年 20 年いやもっと先を見とおすもので，そのあるものは今日すでに実現（苫小牧工業港，幾春別川ダム，大雪国道等），あるものは着工（大雪ダム等）され，そして，あるものは今日議論の的（石狩湾新工業港等）となっている等，先生は偉大な先覚者であった。

昭和 17 年御退官，正 4 位勲 3 等瑞宝章を授与せられ，一時東京に引きあげられたが，菅原組に懇望されて，支配人，副社長に就任，戦争末期から戦後の混乱時代，北海道の建設業に苦労された。昭和 27 年北海道建設業信用保証会社の初代社長に就任，建設業の適正施行，建設業界の健全な発展につとめられ，同社の今日の基礎を固め，同時に北海道機械開発会社（北海道東北開発公庫出資）の取締役，北海道開発コンサルタント会社の初代社長を兼任，昭和 39 年以降はコンサルタント会社の会長として終始せられた。

先生は数多くの要職を兼ねられた。北大工学部講師，北海道開発審議会特別委員（北海道開発庁），北海道総合開発委員，北海道地方森林委員，漁港審議会委員，建設業審議会委員，建設機械化協会支部長，顧問等，枚挙にいとまない。昭和 17 年土木学会北海道支部長をつとめられ，学会発展に熱意を注がれ，昭和 35 年土木学会名誉会員に推挙された。

先生の御生涯は終始北海道開発の推進力であり，われわれの尊敬の的であり，また慈父であった。永年にわたる先生の御功績に対して，昭和 38 年北海道開発庁長官表彰，昭和 39 年建設大臣表彰，勲 3 等旭日中授章の栄誉を受けられた。

先生は晩年，静かにお酒，ビールを楽しんでおられたが，心不全のため 11 月末入院，医師にお酒を止められてから食慾が衰え，急に衰弱されて 12 月 11 日午前 6 時，札幌の自宅で家族の方々に看られて眠るように静かに 84 才の御生涯を閉じられた。そして先生の遺言は告別式，読経，戒名を断り「旧友諸君，もし風の便りに私の死をきかれたら，この馬鹿者を思い出して下されば有難く存じます」と結んでいる。先生の御逝去に対して「銀盃一個賜る」の御沙汰のあったことを申添えさせて頂く。

（正会員　元北海道開発局長　小川　譲二・記）